

目的 既製服が主流の今日においても、着心地の良い衣服とは人体の形態及び機能性に良く適合している衣服であることは言うまでもない。個性重視、余暇時間の増加等の影響により生活形態が変化し、着用する衣服も多種多様になっている。衣服購入時にはサイズ表示が選択の重要ポイントとなるが、服種の多様化に伴い、衣服サイズの適用も拡大してきており、その点からも、カバー率の高いサイズシステムの確立が求められている。本研究では、上衣・下衣の服種別に体型を捉え、それらに対応したサイズシステム提案のための考察を行う。

方法 1978～81年の通商産業省工業技術院「日本人の体格調査」から、成人男子（18～59歳）7231人の33計測項目のデータを資料とし、上衣に関する項目・下衣に関する項目各12項目を設定した。それらのデータを用い、主成分分析を行った。さらに、分割型クラスター分析・KMEANS法により体型の類型化を行った。さらにクロス集計を行い、実際の体型の分布状況を把握し、現行サイズとの比較・検討を試みた。

結果 主成分分析では、上衣に関する項目については、第3主成分まで、下衣に関する項目については第4主成分まで抽出された。年齢の増加に伴い、上衣ではゆきが、下衣では股高に変化が認められた。クラスター分析では、衣服サイズ設定を考慮して上衣・下衣とも5つに体型を類型化し、基準化した値による体型パターンを得た。各年代における各体型パターンの分布状況をみると、顕著な違いが認められた。また、衣服サイズの適用範囲は、同一服種であってもデザインの意図により異なることがわかった。